

宇田道隆『海の心・歌句集』から

四宮義正

高知市出身で寺田寅彦にゆかりの深い海洋物理・水産海洋学者、宇田道隆（明治 38 年～昭和 57 年）の『海の心・歌句集』（昭和 55 年、星書房）は稀覯本である。しかし寺田寅彦記念館の本棚にはちゃんと架蔵されている。これは第一部歌集「潮文字」と第二部句集「魚紋」から成っている。「はしがき」から一部を転記する。

昭和五十六年春は、私にとって数え年で喜寿になり、結婚して五十年、所謂金婚に当る。そこでかねて学生時代から興味を持って作ってきた短歌や俳句をまとめて自祝と共に感謝の意を一冊の本にしたいと思い立った。せっかく作るには海の匂ひ、海の心を盛った特徴をもたせ、私の生涯の証跡としたいと考えた。

とある。前後に自身の経歴や寺田寅彦に俳句を教わったこと、短歌では斎藤茂吉の『赤光』に傾倒し「長崎アララギ会」に入会して作歌活動したこと等が書かれている。

また昭和 52 年 1 月 14 日の歌会始の儀に召人として参内し

金華山沖にしるけき潮すちを いるか群れ飛ぶ夕焼の海

が唱和された思い出を書いている。最後に「ただ歌と句を愛した一人の海洋研究者の半世紀の軌跡を自ら書き残した願望の結集として御一覽頂けるとありがたい。」とある。

多くの作品の中から、寺田寅彦とその周辺及び筆者（四宮）が気になった短歌・俳句を掲載順に紹介してみる。（*は筆者の注記）

第一部 宇田道隆歌集「潮文字」

昭和廿年八月六日 広島原爆負傷

夏空の澄み極まりて海風も吹き初めし朝運命なりし日
窓硝子こなごなとなり吹き飛ばば伏す間あらずわが額打つ
芋の葉もなすびも黍も焼けたれ埃つもりて真日輝れるのみ
比治山の糸萩咲く丘登り来て眼下は焼野の廢墟果てなき

*「陸に上げられた河童」『海の歳時記』（昭和 31 年、法政大学出版局）によると、宇田は陸軍に徴用されており、船舶気象部隊に転属された広島で原子爆弾に遭った。「原爆の思い出」（同前）には「当時私は応召中だったが、この日爆心より二・六キロ南方の専売局附近の一室で出かけの支度にしゃがんでいた。八時十五分頃、突然目も眩む大閃光に続いて息つく間もなく、轟然雪崩のように襲ってきた爆風は、伏せようとする私の額に窓ガラスの粉を吹きつけた。」とある。比治山は、広島市南区に位置する標高約 70m の小高い丘である。

終戦後、当時中央气象台長であった藤原咲平の命により、原爆による特異現象「黒い雨」を含む「気象関係の原子爆弾調査」が行われたが、宇田は中心的役割を担っている。また折からの枕崎台風による大水害・山津波の調査もしている。柳田邦男『空白の天気図』（昭和 56 年、新潮文庫）に詳しく描かれている。「できるだけ多くの体験者に会って聞きとりをして、原爆当日の地域別の状況を再現してみる以外に、研究の手がかりはない」という宇田の方針で膨大なデータが集められ、報告書にまとめられたのである。

この方針について、柳田は「宇田は〔関東大〕震災当時仙台の二高にいたが、翌年震災の跡もまだ生々しい東京に来て東京帝国大学理学部の物理学科に入り、震災時の旋風の調査研究をした寺田寅彦教授から何度か旋風の話聞いていた。宇田は、寺田寅彦が作成した旋風の発生分布図などの調査報告に強い関心を持ち、それを記憶していた。」としている。

伊豆西岸（一首）

陽光の燦めく青潮前にして囲ひし段畑マーガレット咲く

花椿踏みてふるさと墓山の道教え登る孫子を率ゐて

初鯉たたきを前に思ひ出づ逝いて幾とせ酒徒なりし父を

＊父は漢詩人の宇田朋猪（滄溟）。道隆の俳号木瓜庵を命名した。

中谷宇吉郎博士を偲ぶ

リラの花淡墨に描きし遺愛の画展げて見れば匂ふかの宵

大正十一年 仙台

粉雪降る日なりき駅に出迎へしアインシュタインその人を憶ふ

相対性原理聴講

学理説く巨いなる人仰ぎ見て青少吾れは時忘れ居し

＊宇田は仙台の第二高等学校に在学していた。アインシュタインは仙台でも講演した。

中野猿人博士に

退官後八年の日々いそしみて「プリンシピア」訳今成せし友

＊中野（明治 41 年～平成 17 年）は海洋・潮汐学者。ニュートンの著書を翻訳出版した。

高知（一首）

樟並木春陽の葉漏る日曜市花木売り買ふ訛楽しき

浜なすも黄菅も花咲く丘に立てば国後真近く打瀬曳く見ゆ

＊打瀬は底引き網の一種。

遂に成る海洋研究発達史八年の労を刻みし吾が著

＊『海洋研究発達史』は海洋科学基礎講座補巻、331 頁。昭和 53 年、東海大学出版会。

三十余年なほ風化せぬ広島のかの日の記憶よ目にカンナ燃ゆ

寅彦師四十五周忌病む吾れの瞳に泌み燃えつ鶏頭の赤

第二部 宇田木瓜庵句集「魚紋」

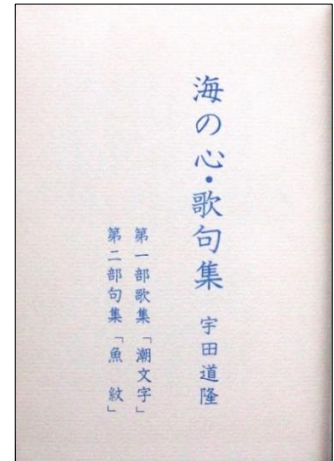
凌霄の朱に揺ぐや青嵐

＊宇田は高知の実家の庭にあった老松の梢にまきついて咲いた「のうぜんかずら」を思い出しながら作句した。手紙（昭和 2 年 8 月 22 日付）で添削してもらい、また多数の推敲案を提示され、詳しく説明してもらっている。「俳諧の手引き』『寅彦先生閑話』（昭和 23 年、弘文堂）

寅彦の凌霄花に対する思い入れが分かるような気がする。

初島沖底刺網

鮫の眼の秋の入目を睨みけり



宇田道隆
『海の心・歌句集』扉

＊「相模湾」『南海北溟』（昭和 18 年、小山書店）に「寺田寅日子先生に直していただいた拙句」とある。「俳諧の手引き」（同前）には寅彦の評として「俳句は己れを沈ましておいて自然に託して現はす、感情と自然が一つになるところを狙つてゐる。あの鯨にせよ、人を睨んだり、自分を睨んだりしてはいけない。これはいい。実にいい句になつた。蕪村以来だね。」といはれてしきりに喜ばれた。（昭和六年十二月七日句作を直さる）とある。

悼田丸卓郎先生（力学の大家）

星墜ちて^お裕^{あはせ}に迫る夜寒かな ＊田丸（明治 5 年～昭和 7 年）の逝去は 9 月 22 日。

オホーツク海上、岡村金太郎先生（海藻学）逝くとの無電に

藻の花の散りて人無き渚かな ＊岡村（慶応 3 年～昭和 10 年）は海藻・水産学者。

寺田寅彦先生病篤し

木枯やとぎれとぎれの鐘の声

昭和十年十二月卅一日 寺田先生逝く

君逝いて四隣^{しりりん}声のむ夜寒かな ＊四隣は、となり近所。

十一月四日 小倉伸吉先生（潮汐学大家）葬

面影を偲ぶ渡しや月の潮 ＊小倉（明治 17 年～昭和 11 年）は海洋・潮汐学者。

昭和十二年二月二日 河東碧梧桐逝く

三千里旅路の果てや北斗凍つ

＊碧梧桐（明治 6 年～昭和 12 年）は日本中を旅して各地で句会を開き、俳句の普及につとめた。『三千里』『続三千里』はその行脚記録。

中谷宇吉郎博士より「雪」の論文受く

誰が成せる雪華のたくみ冬日影

理博士学位論文作成提出

珈琲のよどみすするや^{よみ}夜業^{よなべ}の灯

九月廿二日 藤原咲平先生長逝

蒼穹^{そうきゅう}に消え行かなししらす雲 ＊藤原（明治 17 年～昭和 25 年）は第 5 代中央气象台長。

四月一日 東京水産大学教授に転ず

永き日や牛の歩みは遅くとも

西独ハンブルグ

北海の夜霧に濡れ行く靴の音

スイス国

湖^{うみ}かげりアルプ峰燃ゆ秋入日

十月廿七日 松根東洋城（八十七歳）長逝

青北^{あおきた}の岬^{さき}飛び去りぬ鷹ひとつ

＊松根（明治 11 年～昭和 39 年）は俳人。本名豊次郎。『東洋城全句集』全 3 巻がある。

昭和四十六年四月 高橋浩一郎新気象庁長官に

風信器廻る長閑や春の雲 ＊風信器は風向計。風向を測定する器械。

銀座風月堂

独り侘^わび^{すす}啖^{すす}る珈琲冬彦忌

＊「渦潮」『海の歳時記』（昭和 31 年、法政大学出版局）に「かつて寺田寅彦先生は、よく対話のときコーヒー茶碗をのぞき込んで、さじで液をかき動かしたときの渦をじっと見つめて考えておられたことを思い出す。藤原咲平先生はノルウェーに洋行中、じっと立ちどまって水門の附近の水の渦を観察し、英国の専門雑誌に渦巻の大論文を発表して外国の学者をびっくりさせた。

寺田先生がタバコの煙を観察し、コーヒーの渦を凝視されたのは、やがて航空研究所での独創的な渦の実験的研究にまで発展して行った。」とある。

昭和五十五年九月廿九日

花芙蓉萩^{ふたろうはぎ}も咲く庭妻古稀に

寅日子先生四十五周忌

首振りて師の往ける道銀杏散る

「あとがき」に「ともかくわたくしの歌集、句集はこれが最初であり、多分最後であろうが、この一冊をまとめて世に出し、海の探求に生涯を過した一人の研究者の「海をうたへる」詩魂、一人の人間としての生活の感慨をこめたものとして見て頂けると有り難い。」（昭和五十五年十一月三日）とある。二度の応召による大陸や南方への出征、広島での被爆、船に乗って日本のみならず世界を航海しての水産調査、大学での研究と国際交流など宇田個人の記録の面が多分にあるが、それが魅力と面白味を増している。先達・友人・知人・家族を悼む歌句も多い。昭和 4～55 年に詠んだ短歌 349 首、俳句 478 句の収載があるから、ここに紹介したのはごく一部である。著者の思いを知るには、やはり全部を読みたいもので、その切っ掛けになればと願うものである。

《補足》『海の心・歌句集』に掲載されていない俳句

宇田には寅彦に関する著作が多数あるが、そこにも師を忍ぶ句が出ている。

行く年や^{なんてん}南天の実の地に凍てて
蔓^{つる}ばらの枯れたる門にただ涙

以上 2 句は『寺田寅彦』（昭和 37 年、国土社）に、寅彦が亡くなった時に読んだ句として「君^{きみ}逝いて四隣^{りりん}声のむ夜寒^{よさむ}かな」に続いて出ている。

行く年や八つ手の花粉落ちしまま
参らせむ人はおわさず初苺

以上 2 句は「思い出の寺田寅彦先生」『寺田寅彦』（昭和 23 年、弘文堂）にある。ただ、「行く年や…」は寅彦生前の句のようで「俳諧の手引き」（同前）に、寅彦評「身体の引きしまるやうな冬の感じだ。」（昭和九年暮句稿）とある。

夢十とせ行く人もなく銀杏散る

「あれから十五年」『寺田寅彦全集』月報 5（昭和 25 年、岩波書店）

その他、（昭和九年暮句稿）で、原句「団栗をつぎつぎに出すかくし哉」を寅彦が「団栗を小さき指でならべけり」と添削しているのも、気が引かれるところである。